

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 30 日現在

機関番号：32677

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381048

研究課題名(和文) 理論と実践をつなぐリアリスティック教師教育の導入と効果に関する研究

研究課題名(英文) \*The Effect of Introduction of Realistic Teacher Education which enables to link Theory and Practice

研究代表者

武田 信子 (TAKEDA, Nobuko)

武蔵大学・人文学部・教授

研究者番号：00247123

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：教師教育のリアリスティック・アプローチの理念と技法を、教師教育、つまり、教員養成、教員研修、教師教育者の専門性開発の3分野の現場に導入し、その現状やニーズに対応したプログラムを研究開発した。さらに、今後の教師教育のリアリスティック・アプローチの日本での展開基盤を構築するため、教員の質保証と資質向上に役立てるためのワークブックを出版して、現場教員と共に活用の方策を検討するプラットフォームを組織化した。

研究成果の概要(英文)：We introduced the pedagogy and the techniques of realistic teacher education into Japan and developed the teacher training programs which match to the current situation of the education in Japan. In addition, we published our book which enabled the quality assurance and quality improvement of teachers, organized a platform to discuss strategies for promoting realistic teacher education with in-service teachers and built the deployment base for the realistic teacher education in Japan.

研究分野：\*教師教育学 臨床心理学 教育心理学

キーワード：\*リフレクション 理論と実践の往還 リアリスティック・アプローチ 専門性 コルトハーゲン 教師教育 教師教育者 質保証

## 1. 研究開始当初の背景

平成 17 年 OECD は “ Teachers Matter ” において教師教育の国際的状況を報告した。変動する情報化社会・知識基盤社会の中で、従来の教育では対応できない課題が各国に噴出しており、新しい社会の新しい教育に対応できる新たな教師教育が必要とされていた。日本もまたその例外ではなかった。例えば教員養成においては、省察や理論と実践の往還の重要性が強調され(中教審,2006)、教員研修では、教員の自律性を高める参加型研修の必要性が唱えられていた(南部,2011)(Cranton,1992)。しかし具体的で効果的なプログラムは未開発であった。

研究代表者は、平成 19 年にユトレヒト大学の Fred Korthagen 教授らが開発・展開し、効果を実証してきた RTE をオランダで体験し、理論と実践の往還を促進して教員の自律性を高める実践的アプローチの日本への導入の必要性を確信して、平成 22 年に、各国語に翻訳されている同氏の著書 “ Linking Practice and Theory: The Pedagogy of Realistic Teacher Education ” を山辺恵理子(研究協力者)らと邦訳出版した。

教師教育は長く理論と実践が乖離したまま進められてきたが、D.Schön(1984)の「反省的実践家」概念の登場以来、その往還・統合の必要性が強調され、省察がそのキーであると言われるようになった。ところが、報告者の体験あるいは実践報告に対し、仲間や指導者が自分の体験をもとにコメント・議論し、実践者が「反省」するという、日本で今も広く行われている省察の方法では、実際の行動改善の促進は困難であることが指摘されていた(Korthagen,2004)。

それに対して RTE は、省察の理想的なモデルを説明し、乖離を埋める手助けとなり、ALACT モデルや省察のポイントとなる視点の明示によって、その手法を学んだ者の省察を可能とし、その後、さらに学習者が日常的に自分で自分の行動の基となる中核的な資質まで至る省察(コア・リフレクション)ができるように成長・変化させていくアプローチであった。

大学と現場における 10 年以上の研究期間を経て、RTE の理論と実践に関する前出書が、平成 13 年に英語で出版されるや、RTE は、従前の「教師教育者が教え、学習者が応用する(はずだが実際はできない)」教師教育モデルと全く異なる「学習者が自らの経験を省察して自分なりの実践知を持ち、それを学問知とつなげて考えることができるよう教師教育者が学習をサポートする」という構図を用いたことが評価され、オランダはもとより欧米から世界に広がり、それぞれの地で展開しつつあった(F.Korthagen et al.2008)。たとえば、既に本プログラム実践の導入を先行実施して教師教育の効果を上げていた南オレゴン大学とその周辺大学においても、継続的なトレーニングの機会の確保と

F.Korthagen 氏の招聘を経て、ファシリテーター育成・プログラム普及に成功していた(Kim&Greene,2010)。

本研究は、この RTE を日本の教師教育に導入し、新しい発想、技法として根付かせようとするものであった。理論を大学で、実践は現場でという技術的合理性アプローチによる教員養成や、知識・情報や理論の一方的教示や根拠の明示されない実践経験に基づく助言が問題と指摘されている教員研修に、新しい流れを生み出すよう、一定数の教師教育者をトレーニングして、その効果を図った。既に研究代表者らは、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「教員のコンピテンシーリスト開発と成長モデルの構築に関する国際協同研究」(H21-23)とその後の実践において、教員養成及び教員研修に RTE の技法の一部を取り入れてきており、成果として「教師のためのリフレクション・ワークブック」も作成していたため、これらの内容を継続発展させることも企図していた。

本研究が対象に想定したのは、日本でまだその概念が未確立の「教師教育者」、つまり大学や現場の養成・研修担当者である。既に経験を積んだベテランを巻き込んで、「教師教育者の専門性開発」概念の普及と啓発を視野に置きながら探索的に研究活動を展開していくことが必要であるとの認識から、本研究は開始された。

## 2. 研究の目的

(1) RTE の具体的手法を学んだ各地の教師教育学研究会メンバー(後述)と F.Korthagen 氏の協働によって、RTE の理念と具体的技法を日本の教師教育のフィールドに導入し、学校現場との協働体制の中でプログラム開発を行い、自律的に省察し、成長し続ける実践家としての教員の養成・研修を試みる。

(2) RTE 導入のプロセス自体も研究対象とし、今後の教師教育において、RTE を日本ですみやかに展開していくための基盤を構築する。

(3) 日本教師教育学会年報第 21 号において、日本では教師教育を担う教師教育者の専門性が問われていないことが課題として特集され、特集巻頭論文「教師教育実践への問い-教師教育者の専門性開発促進のために-」(武田,2012)で、その具体的な指摘を行った。このような動向の中で本研究は、国際的な観点も踏まえた上で、RTE の実践を通して日本で未確立の教師教育者の専門性開発の概念の普及・啓発を図る。

既にフィールドを持ち、本プログラムの経験も持つ教師教育学研究会メンバーが情報交換しつつ、学校教員や研修担当者、教育研究者たちに、直接的・具体的に処方提示することによって効果を上げ、草の根的に浸透を図ることに挑戦する。

### 3. 研究の方法

#### (1) 【平成 25 年度】

##### 理論研究

欧州の教師教育研究に取り組み、欧州教師教育学会（ATEE）参加の各国メンバーとつながりのある坂田（分担者）を中心に、前出の F.Korthagen 著の翻訳本以後の RTE に関する最新の研究動向を調査した。また、海外の文献等の日本への翻訳について、同じく、欧州の教師教育研究者とのつながりがある山辺（研究協力者、後に分担者）の協力を仰いだ。論文等、文献の検討だけでなく、RTE が生み出されたオランダにおける調査、アメリカ教育研究学会 AERA への参加、RTE をすでに取り入れ実践の実績がある南オレゴン大学への訪問、など、いくつかの国々での現地調査も併せて行った。この研究は、8 月に開催された ATEE 年次大会（ノルウェー）で新たな情報を得てさらに展開された。

##### 国内実践フィールドの調整

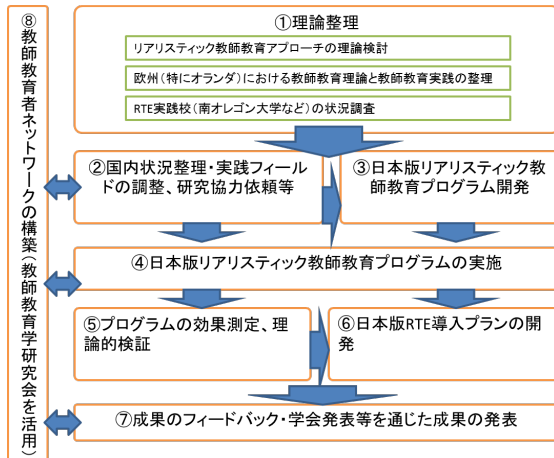
と並行して国内の実践フィールドの調整を、矢野（分担者）を中心に進めた。矢野が既に研究フィールドとしていた地方自治体の教育委員会/各学校に協力を依頼したほか、教師教育学研究会メンバーが所属する大学、その大学の協力校を研究実践のフィールドとして活用し、これらのメンバーと協力しながら、実践のためのフィールド整備を行った。

##### 日本版リアリスティック教師教育プログラム開発

先行する理論研究の結果およびワークショップ等の結果を検討し、日本の教師教育の現状・ニーズに対応した形でのプログラム開発に取り組んだ。研究代表者が主宰する教師教育学研究会のメンバーを中心として、2011 年に F.Korthagen 氏による同プログラムを受講したが、このプログラム及び研究代表者がこれまでに対人支援職対象に開発してきたグループワークなどをベースとし、日本の状況に合うプログラム体系を再度構築することを計画した。

##### 日本版リアリスティック教師教育プログラムの実施

で開発に取り組んだプログラムを、教師教育者や教員対象に試行した。



#### 【平成 26 年度以降】

##### 包括的なプログラム評価とフィードバック

プログラム参加者にレビューを行った。日本の学校現場、教員養成機関における本プログラムの親和性・応用性の高さについて専門家や関係者によるレビュー形式で検討した。

##### 日本版 RTE 導入プランの開発

これまでの結果をまとめ、日本における RTE の具体的な展開を構想し、実際に各機関で実施可能なプログラムを「リフレクション・ワークブック」の改訂を繰り返す中でまとめた。

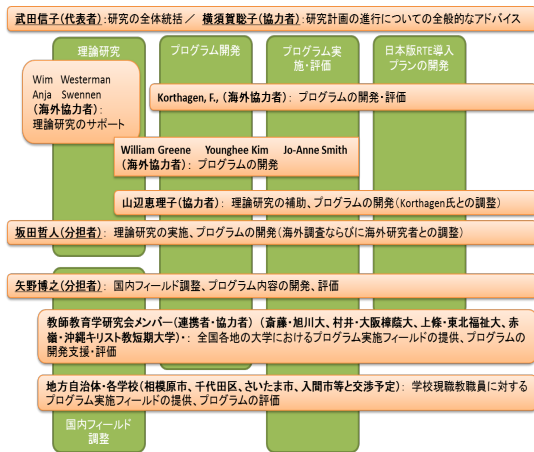
成果のフィードバック、学会発表等を通じて成果の発表実践状況をまとめ、理論化への検討を加えた。学会発表のほか、学術論文や研究成果報告の形で発表した。

##### 国内への実践者ネットワークへの展開

本研究に参加する代表者、分担者、および教師教育学研究会のメンバーを通じて、あるいは学会発表や論文発表、ホームページやフェイスブックページにおける広報などを通じて、国内関係者への情報提供を行った。この情報提供によって企図することは、一般的に情報を提供することのみならず、むしろ、このプログラムを実践していく実践者のためのコミュニティを形成し、そこに積極的に情報を提供していくことにあった。コミュニティを形成し、そのメンバーを中心として国内へ浸透させていくという方法をとることで、実践に直結した浸透を図った。日本の文脈へのカスタマイズ、継続性を担保するためには、実践者間のコミュニティを形成し、相互的に学習するための場（ラーニング・コミュニティ）が必要不可欠であった。

##### [本研究の体制]

武田（代表者）が研究統括を担当し、以下 2 つのチームに分かれて相互に連携し研究を推進した。



坂田（分担者）は、理論的な側面から本研究をサポートし、海外研究者の招聘等、海外に関する諸般を担当した。

矢野（分担者）は、日本国内における実践フィールドの開発に携わった。研究会メンバー

や各地方自治体の担当者等と調整しながら、プログラム導入、実践、評価のための環境を整えた。

各チームで上図にあるような複数名の海外・国内それぞれの協力者ネットワークを形成し分担者の計画を支援した。

[研究開始までの準備状況]

本研究の中心となる教師教育学研究会は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究(B)「教員のコンピテンシーリスト開発と成長モデルの構築に関する国際協同研究」(H21-23)(代表武田信子)のメンバーを中心に、平成21年に、RTEの理論検討を含め、教師教育学全般にわたる研究を目的として代表者によって立ち上げられていた。月例研究会を経て、平成22年9月、F.Korthagen氏を来日招聘して第20回日本教師教育学会研究大会における特別講演を実現し、同時に2つの教師教育ワークショップを主催して耳目を集めた。その後、全国の教師教育者を集め、文部科学副大臣の参加を得てリアル熟議「教師教育について語ろう」を開催。平成23年8月にはオランダで9名の教師教育者による3日半のRTEワークショップを実現し、帰国後に報告会を開催した。12月にはアメリカにおいてRTEを展開している南オレゴン大学J.Smith教授の来日に合わせ、本研究に関する協力を依頼した。またF.Korthagen氏、南オレゴン大学の3名の教師教育者とは、平成24年7月にもソウルにてミーティングを開催し、協力依頼が完了している状況であった。また、南オレゴン大学Smith,J.教授の来日に合わせてミーティングを行い、さらに平成24年7月にもF.Korthagen氏、南オレゴン大学の3名の教師教育者との研究ミーティングを開催し、研究協力依頼がすでに完了していた。

#### 4. 研究成果

教師教育のリアリスティック・アプローチの理念と技法を、教師教育、つまり、教員養成、教員研修、教師教育者の専門性開発の3分野の現場に導入し、その現状やニーズに対応したプログラムを研究開発した。さらに、今後の教師教育のリアリスティック・アプローチの日本での展開基盤を構築するため、教員の質保証と資質向上に役立てるためのワークブックを出版し、現場教員と共に活用の方策を検討するプラットフォームを組織化した。

##### (1)リアリスティック教師教育の導入

武蔵大学、大妻女子大学等、国内の複数の教職課程における教員養成の授業において、リアリスティック教師教育の導入を図った。

島根大学教員免許状更新講習や現職教員研修において、『教員のためのリフレクション・ワークブック』を用いた研修を実施した。

現職教員らとともに教師教育学勉強会を立ち上げ、リフレクションやリアリスティック・アプローチの現場での活用可能性を検討する体制を整えた。

##### (2)導入の評価

一昨年から継続されている熊本県教育委員会における取組に関するヒアリング調査  
相模原市内の学校の校内研修の実践分析  
大阪樟蔭女子大学・沖縄キリスト教短期大学等の大学における実践の分析調査

(3)成果のフィードバック、学会発表等を通じた成果の発表

ヨーロッパ教師教育学会への参加。情報収集と本研究の成果に関する口頭発表

日本教師教育学会における口頭発表  
教師教育専門誌 SYNAPSE(平成26年度11月号及び平成27年度5月号)にリアリスティック教師教育に関する論考を投稿。

武蔵大学総合研究所紀要への論文掲載。  
教師教育に関する書籍「教師教育」(さくら社)への執筆。

(4)国内への実践者ネットワークへの展開:オランダで発展したリアリスティック教師教育を日本の文脈にカスタマイズし、継続性を担保するための実践者間のコミュニティ形成と相互学習のラーニングコミュニティを作った。

教師教育学勉強会を立ち上げて、毎月開催し、リアリスティック教師教育を現場教員の研修に導入する際の課題を検討した。

教師教育学研究会のフェイスブックページ及びグループページの運営。最新の教師教育学に関する情報を提供し、現職教員らの教師教育への関心が高まり(メンバー500人以上)、インターネット上の広報や議論が活発に行われた。

一連の研究の中で、これまでの成果を活かした形で、教師教育学研究会コアメンバー(過半数が科研メンバー)による一般社団法人 REFLECT が立ちあげられた。

(5)「教員のためのリフレクション・ワークブック 往還する理論と実践」の全面改訂及び出版。教職大学院や教育学研究科、教職課程のテキストとして全国で活用されている。

(6)3年間の研究成果は、各メンバーが分担し、それぞれ論文としてまとめた。タイトルは「理論と実践をつなぐリアリスティック教師教育の導入と効果に関する研究」(武田)「リアリスティック・アプローチと活用上の問題点」(坂田)「リアリスティック・アプローチ教育の日本での展開の経過と可能性を追う」(矢野)「コア・リフレクションの日本における展開可能性について」(山辺)「リフレクション・ワークブック第3版の改訂」(金井)である。これらの論文の掲載された報告書を現在作成中である。

#### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 9件)

武田信子 大学・教育委員会の連携研修  
教員研修モデルカリキュラムにみる連携促進のポイント 第4回 リフレクションを基盤としたミドルリーダー育成プログラム  
Synapse, 査読無, 2015, 4月号, 46-51

武田信子 『教員のためのリフレクション・ワークブック』活用の新展開 ~ 熊本県教育センターの事例 武蔵大学総合研究所紀要 査読無,24 巻,2015,7-17

坂田哲人 「教育実習生を指導する 5 段階の手順」の実践と実践上の課題 武蔵大学総合研究所紀要,査読無,24 回 2015,2-6

矢野博之 日本における学校現場への RTE 導入の反応・評価とその後 武蔵大学総合研究所紀要,査読無,24 巻,2015,18-22

武田信子 教員のリフレクションを支援するボトムアップの試み Synapse,査読無 11 月号,2014,26-30

武田信子・坂田哲人・矢野博之・横須賀聡子 教師教育のリアリスティック・アプローチの展開 武蔵大学総合研究所紀要 査読無, 第 23 号,2014,1-28

坂田哲人 オランダの教員養成の取り組みと地域学校連合が教員採用に与える影響 東京学芸大学教員養成カリキュラム研究開発センター共同研究プロジェクト報告書 査読無,2014,21-29

坂田哲人 PLC(Professional Learning Community)に関する議論の整理 青山インフォメーションサイエンス 査読無, 第 42 号,2014,22-25

矢野博之 パネルシアターの実践指導法研究(1)-モーリシャスでの指導ワークショップを事例として 大妻女子大学「家政系研究紀要」査読無,第 50 号,2013,59-68

〔学会発表〕(計 5 件)

Tetsuhito Sakata, Masahiro Nakada, Daisuke Choshi and Takehiro Wakimoto Professional Development of Teachers through Lesson Study, and its implication on school organization in cooperation with external teacher educators The Nordic Educational Research Association 43rd Congress 2015 年 03 月 08 日 Gothenburg Sweden

坂田哲人・中田正弘・脇本健弘・町支大祐 学習する学校に果たす教師教育研究者の役割に関する研究 -校内授業研究を基盤として- 日本教師教育学会 2014 年 9 月 28 日 玉川大学 東京都町田市

武田信子・金井香里 「教員のためのリフレクション・ワークブック」の活用可能性について 日本教師教育学会 2014 年 9 月 27 日 玉川大学 東京都町田市

Nobuko Takeda The History, the Status, the Further Development of Teacher Education in Japan Association for Teacher Education in Europe 2014.8.25 University of Minho, Braga, Portugal

武田信子・山辺恵理子・村井尚子 教員の資質能力という概念をめぐる議論と課題 日本教師教育学会第 23 回研究大会 2013 年 9 月 15 日 佛教大学

〔図書〕(計 3 件)

武田信子 金井香里 横須賀聡子 教員のためのリフレクション・ワークブック 往還する理論と実践 学事出版 2016,111 頁

武田信子 教師教育(分担執筆 理論と実践をつなぐ教師教育方法とは?) さくら社 2015,104-109

山辺恵理子 教師教育(分担執筆 フレット・コルトハーヘン) さくら社 2015,182-187

矢野博之・山崎準二共編 新・教職入門 学文社 2014,200 頁

〔その他〕

ホームページ

教師教育学研究会ウェブサイト

<http://www.teachereducation-jp.org/>

教師教育学研究会フェイスブックページ

<https://www.facebook.com/teachereducation.jp/>

教師教育学研究会グループページ

<https://www.facebook.com/groups/1542475529309354/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

武田 信子 (TAKEDA, Nobuko) 武蔵大学. 人文学部. 教授 研究者番号:00247123

(2)研究分担者

矢野 博之 (YANO, Hiroyuki) 大妻女子大学. 家政学部. 准教授 研究者番号:40365052

坂田 哲人 (SAKATA, Tetsuhito) 青山学院大学. 付置研究所. 助教. 研究者番号:70571884

金井 香里 (KANAI, Kaori) 武蔵大学. 人文学部. 准教授 研究者番号:20722838

山辺 恵理子 (YAMABE, Eriko) 東京大学. 学内共同利用施設等. 研究員 研究者番号: 60612322

(4)研究協力者

横須賀 聡子 (YOKOSUKA, Satoko) NPO 法人リヴォルヴ学校教育研究所. 理事